琴川亭記

中国と日本の交流は、「正史」において詳細に記されている。唐の天宝時代、鑑真和上は常熟市の黄泗浦港から東に向かって九州に渡航したとされている。当時、常熟市は呉郡に属しており、一説には（太古の昔から）互いに往来する船舶は嵊山角を経由して澶州五島に入り、甑島と天堂宮渡まで往来していたとある。即ち、川内の海域である。このことからも、両市の交流が当時より育まれていたと言えるのではなかろうか。

常熟市は周太王の次男が邦を譲られたことで有名になり、さらに、孔子の弟子である言子が文化を発展させたことで広く知られるようになった。当時、この地はビ陵郡南沙（※）と呉郡海虞に位置したが、梁の時代になって「土壌が肥え、毎年水害も干害もない」ことに由来し、「常熟」と名付けられた。また、山がきれいで、湖が鏡のように連なって並んでいるので、昔から「十里の青い山が半分街に入り、七本の小川が皆海に通じる」と称され、その形が古琴に似ていることから「琴川」との異名でも知られている。

一方、川内市は南九州に位置し、古代には薩摩国の中心地として栄えた。伝統では、天孫「瓊瓊杵尊」の神様が天から高千穂に降りてこられ、川内の地に千の台（宮殿）を作られたとある。また、史書をひもとくと、川内川は「川内川」、「千台川」、「千代川」などと書かれている。この、市内の中央を洋々と流れる川内川は、水が澄み故に、川内の土地が肥え、人々の情が深いとされている。また、可愛山稜、薩摩国分寺跡、泰平寺などのように古を遠く偲ばせる史跡も有する。常熟市、川内市、共に賢人の古里で、文明の地である。

二十世紀八十年代から、両市の友好交流は盛んになってきた。友好都市締結三周年の際、川内市民からの募金を募り、紅葉の木を数千株、常熟市の尚湖に植栽し、「川内の森」と名付けた。七年後、今度は常熟市民が伝統の六角亭を一つ、川内市総合運動公園に立てた。琴川の「琴」と川内の「川」の文字をとり、「琴川亭」と命名した。両市の、永遠の友情と平和の象徴である。

後記

東屋「琴川亭」は、川内市・常熟市友好都市締結十周年を記念して、常熟市から建築団六名の派遣により、平成十三年六月に、川内市総合運動公園内に建設され、寄贈されたものです。

補記

東屋「琴川亭」は、平成十三年に建設されてから二十年以上が経過し、老朽化による損傷により修繕が困難となったため、令和五年十二月に解体撤去し、在りし日の「琴川亭」を偲ぶため、看板を国際交流センター内に展示、石碑及び東屋の擬宝珠を同施設の園庭に移設展示を行いました。

（※）変換されない文字のため、カタカナ記載をしています。
文字のご確認は写真データをご覧ください。